

『四海茫茫』

⑫ 異人館と親子2代

本シリーズの前回末尾に紹介した『一般財団法人山縣記念財団』は1940年(昭和15年)の『財団法人辰馬海事記念財団』設立に始まり、その後、『財団法人辰馬海事文化研究所』『財団法人海事文化研究所』『財団法人山縣記財団』と名称変更を重ね現在に至る。

山縣勝見氏には「海運業はひとたび好況の波が過ぎ去ると後には泡沫(うたかた)のごとく何物も残されていない。このさびしさをわれわれは決して、われわれの後に続く者に嘗めさせてはならない」との思いがあった。それが募り、やがて「わが国海運業は企業の後進性を速やかに脱してその近代化を図ることが急務であり、そのためには海運に対する学際的取り組みが何よりも肝要」と考えるに至り、海事に関する調査研究、図書資料の出版、その他海事の発展に貢献する事業を恒久的に実施するための施設として財団の設立に踏み切った。

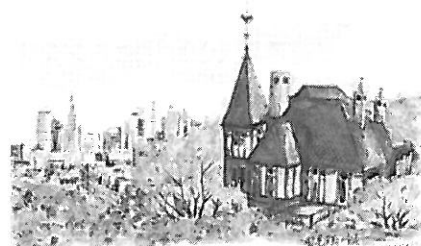
山縣氏の志は一私企業にとどまらず、いつも海運界全体の公益に向けられていた。海運倶楽部や日本船主協会海運研究所をつくったのも山縣氏である。また、財団の活動は『日本海法学会』や『日本海運経済学会』の設立に大きく寄与した。

財団は現在、東京に事務所を置いている。所在地は東京都中央区八丁堀3-10-3正和ビル5階(電話03-3552-6310)で現理事長は小林一夫氏。創立時は辰馬汽船会社内(兵庫県西宮)に事務所を置いていた。その後、曲折があって現在地に落ち着いた。おもしろいのは財団と神戸異人館『風見鶏の館』の関係。この館には「旧トーマス邸」の呼び名がある。ドイツ貿易商の住宅と

して1904年(明治37年)北野の地に建築された2階建て洋館だ。館にはゴシック風の塔屋があり、その頂に風見鶏が付いている。このことから「風見鶏の館」と呼ばれるようになり、NHK朝の連続ドラマ『風見鶏』が放映されたこともあって神戸を代表する観光名所ともなった。戦前、山縣勝見氏はこの洋館が気に入って購入した。実際の所有者は新日本汽船。後に財団が所有し、財団の研究室がこの館の中にあつたという。財団が館を売却したのは1968年(昭和43年)。売却先は中華同文学校で、1978年(昭和53年)に国の重要文化財に指定され、以来、神戸市所有の建物となっている。新日本汽船の本社が神戸居留地の京町筋にあつた時代、社員は北野の急勾配の坂道を歩いて上り、風見鶏の館の大広間に集まるが多かつたという。

また、風見鶏の館の隣には『萌黄の館』が存在する。こちらも有名な異人館である。明治時代の米国総領事ハンター・シャープ氏の住まいだったので「旧シャープ邸」と呼ばれている。後に神戸電鉄社長の小林秀雄氏が購入し住居としたことから「小林家住宅」の呼び名もある。山縣勝見氏の長男、元彦氏はこの小林秀雄氏の娘、恒子さんと結婚した。恒子さんは結婚するまで萌黄の館の住人だった。田村茂さん(本欄97参照)が風見鶏と萌黄のふたつの館をスケッチに残している。田村さんにとって異人館は偉大な海運人の昔日を思い起こす“よすが”だった。

山縣元彦氏についても触れておきたい。記者が氏に初めて接触したのは1970年代。いつも控え目な佇まいで「山縣家の御曹司」という雰囲気



風見鶏の館(田村茂氏のスケッチ)

気を微塵も見せないご仁だった。

氏は1935年(昭和10年)西宮市生まれ。58年(昭和33年)慶応法学部を卒業し新日本汽船に入社しているが、入社した年の9月から60年(昭和35年)8月までの2年間は米国ワシントンDCのジョージタウン大学で学んだ。さらに留学を終えた後の60年9月から翌年6月まではニューヨーク駐在員を命じられている。つまり慶応を卒業し入社してからの3年間は米国暮らしだった。それを聞いただけで記者は驚き「やはり御曹司だ」と思い、声にも出してしまった。元彦氏にすれば迷惑であつたろう。会話が弾まなくなり、氏からの取材はその後もうまく運ばなかつた。が、1992年(平成4年)初夏のやりとりはいつもと違った。

この年、第1回アジア船主フォーラムが東京で開催され、各国船主協会は船腹需給関係を改善するため既存船の解撤を促進することで合意していた。また、解撤促進を具体化するため日本船主協会は日本造船工業会と合同で『船舶解撤問題共同検討委員会』(委員長=転法輪奏・商船三井社長)を立ち上げていた。当時、ナビックスライン常務の元彦氏は委員の1人だった。氏は記者の取材を受け、珍しく早口でしかも声を大にして明瞭に解撤促進の必要性を力説した。

(瓜生隆幸)